

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：27601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00666

研究課題名(和文) 中間領域の構造分析と文法現象の研究

研究課題名(英文) A study on the syntactic structure of the middle field and related grammatical phenomena

研究代表者

福田 稔 (Fukuda, Minoru)

宮崎公立大学・人文学部・教授

研究者番号：00228917

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：VP構造を発展させたChomsky (1995)のvP構造に、中間領域(非項位置から成る左周辺部)があるという仮説を検証した。[1]論理的問題：vPの中間領域をミニマリスト・プログラムの併合によって派生が可能であると論じた。中間領域を仮定してもCPとvPの平衡性は維持される。[2]英語の分析：資料収集を通して、ゲルマン語派である現代英語において、中間領域を想定した分析が可能である見通しを得た。[3]日本語の分析：中間領域を想定した文構造分析が可能であると論じた。アルタイ語族である日本語での中間領域の経験的根拠を示した。[4]DPの中間領域：名詞句構造でも、中間領域を想定した分析が可能である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、生成統語論にはカートグラフィー分析とミニマリスト・プログラムという2大潮流がある。しかし、理論と記述のどちらを優先させるかと言う点で相反する側面がある。本研究は両者に跨るが、理論と記述のバランスの取れた研究を目指した。

なお、中間領域に関する研究は、(イタリック語派の)イタリア語の分析が主であったが、その他の語派の研究での検証が遅れていた。本研究では、これ以外の言語を分析したので、研究対象言語の偏りを是正する点でも貢献した。

研究成果の概要(英文)：The hypothesis that the vP structure of Chomsky (1995), which developed the VP structure, has an intermediate domain (left periphery consisting of non-term positions) was tested. [1] A logical problem: the intermediate region of vP can be derived by Merge, as assumed in the minimalist program. The parallelism between CP and vP is maintained even if an intermediate domain is assumed. [2] An analysis of English: The data collection process revealed a potential avenue for analysis in modern English, a Germanic language, which assumes the existence of an intermediate domain. [3] The analysis of Japanese demonstrated that sentence structure can be analyzed in terms of an intermediate domain. [4] Nominal phrases. It was demonstrated that nominal structure can be analyzed in terms of an intermediate domain.

研究分野：統語論、構造分析

キーワード：統語論 カートグラフィー ミニマリスト・プログラム vP 中間領域

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

Chomsky (1995)はVP構造を発展させvP構造を提案した。Belletti (2009)はイタリア語の分析において、vPに非項位置から成る左周辺部を仮定する分析を提案している。これが中間領域(middle field)である。

研究開始当初は、イタリック語派のイタリア語以外の研究においては、中間領域に関する目立った研究がない状況にあった。そこで、本研究では中間領域に関する研究情報を収集することを基盤とし、さらに、研究活動を通して、中間領域に関する新たな研究を発信することを基軸とした。

2. 研究の目的

本研究では以下の[A]と[B]の2点に着目し、中間領域の理論的妥当性と経験的妥当性の検証を行い、その仮説を支持する議論を行うこととした。

[A]既存の分析との理論的整合性は保たれるのか。Chomsky (2015)はCPとvPの平衡性を論じているが、これは中間領域を仮定しても維持できるのか。(論理的問題)

[B]中間領域は経験的にも支持できるのか。イタリック語派のイタリア語の研究に加えて、ゲルマン語派の英語やアルタイ語族の日本語の分析も必要である(英語の分析、日本語の分析)。また、CPと同様にDPにも左周辺部があると指摘されているが、DPにも中間領域があるのか(DPの中間領域)。

上記の2つをさらに具体化し、[1]から[4]の4つの問題や課題について研究を行い、中間領域を支持する研究活動を行なった。必要に応じて、関連する研究も行うこととした。

[1]論理的問題：中間領域を仮定することで生じる論理的問題を解決する

[2]英語の分析：ゲルマン語派の英語の文法現象と構文の分析を通して、経験的根拠を示す。例えば、話題化、焦点化、右方移動などの移動の着陸地点を分析する。束縛関係や小節も分析の対象とする。

[3]日本語の分析：話題化、焦点化、かき混ぜの着陸地点、副詞の位置を分析することで、アルタイ語族である日本語から経験的根拠を示す。

[4]DPの中間領域：CPだけでなくDPも左周辺部があると指摘されているが、移動、削除、束縛などを考察して、DPにも中間領域があるのかを解明する。

3. 研究の方法

研究活動を確実に遂行するために、研究体制を整えて、研究成果の表の推進し、年度計画の明確化した。

(1)研究体制：研究上の責任を明らかにし、計画を円滑に遂行するために、研究に従事する3名が「本研究で何をどのように、どこまで明らかにしようとするのか」の各テーマのリーダーとなった。代表者の福田は、論理的問題とDPの中間領域の研究リーダー。分担者の古川は、英語の分析の研究リーダー。分担者の中村は、日本語の分析の研究リーダー。全体的な調整は代表者の福田が行った。なお、不測の事態に対しては、テーマに優先順位を付けたり、研究会や参加学会の開催日や場所を変更することで対応する。

(2)研究方法：研究目的を確実に達成するために研究活動を、「基本文献の収集と資料収集」「研究会開催」「学会での発表や論文執筆」「投稿による成果の公表」「研究成果報告書の作成」の4つに分類し、年度毎の研究目的と活動内容を明確にする。

(3)年度毎の計画と実施状況：

2019年度[1]文献・資料の収集：文献資料収集だけでなく、新たな資料を発掘するためにコーパスなども利用する。最終年度まで各研究リーダーを中心にを行い、情報を共有しながら研究発表や論文執筆での活用に努めた。[2]研究会開催：予定通りに研究会(インターネット会議1回、福岡市2回)を開催した。[3]研究成果の公表：ホームページを作成して研究活動を最終年度まで報告した。

2020 年度 [1] 研究会開催：予定通りに研究会（インターネット会議 2 回、福岡市 1 回）を開催した。[2] 研究成果の公表：予定通りに海外の学会（第 53 回ヨーロッパ言語学会、オンライン開催）において、3 名による共同研究発表を行なった。また、論文を執筆して研究雑誌等に投稿した。

2021 年度 [1] 研究会開催：予定通りに研究会（インターネット会議 5 回）を開催した。[2] 研究成果の公表：新型コロナ感染流行のために、国内学会でシンポジウムなどの実施を見送り、翌年度に開催することで準備を進めた。学会担当から内諾を得て、開催の見通しを得ることができた。また、論文発表も行なった。

2022 年度 [1] 研究会開催：予定通りに研究会（インターネット会議 6 回）を開催した。[2] 研究成果の公表：日本英文学会九州支部第 75 回大会において、シンポジウム「統語論と言語学関連分野とのインターフェイス」を企画運営し、研究発表を行なった。論文を研究雑誌等に投稿した。研究活動期間を 1 年延長する手続きを行い、2022 年度に予定していた、海外の学会での発表は 2023 年度に実施することとなった。

2023 年度 [1] 研究会開催：予定通りに研究会（インターネット会議 1 回、福岡市 2 回）を開催した。[2] 研究成果の公表：代表者の福田と分担者の古川が第 25 回ソウル国際生成文法学会において共著でポスター発表を、ドイツ国オスナブリュック大学で開催された学会「話題、焦点、主語」学会 (Topic, Focus, and Subject 23 (TFS 23)) において共著で口頭発表を行った。また、分担者の中村が、2023 年 8 月にギリシャ国アテネ大学で開催されたヨーロッパ言語学会 (SLE) のワークショップにおいて口頭発表を行った。また、論文を研究雑誌等に投稿した。

4 . 研究成果

VP 構造を発展させた Chomsky (1995) の vP 構造に、非項位置 (non-argument position) から成る左周辺部 (left periphery) 、つまり、中間領域 (middle field) があるという仮説を、本研究では、以下の 4 つの具体的なテーマのもとで研究活動を行った。その成果は以下の通りである。

[1] 論理的問題：中間領域を仮定する際に生じる課題の解決を図った。具体的には、vP での中間領域を持つ構文の構造派生を、ミニマリスト・プログラムの構造派生を想定して、併合 (Merge) による派生が可能であると論じた (例えば、福田 稔 (2020) “A Merge-based Analysis of the Left Periphery of vP” など)。したがって、中間領域を仮定しても CP と vP の平衡性は維持できる。

[2] 英語の分析：研究リーダーが新型コロナに 2 度感染したことで、この課題に関する研究活動が最も遅れてしまったが、資料収集を通して、ゲルマン語派である現代英語においても、中間領域を想定した文構造分析が可能である見通しを得られた。

[3] 日本語の分析：時制を欠く文構造であっても、中間領域を想定した文構造分析が可能であることを示すことができた (例えば、福田 稔 (2021) “A Syntactic Analysis of the Lexical, Pragmatic, and Semantic Properties of “Clausal” Nominal Expressions in Colloquial Japanese” など)。帰結として、アルタイ語族である日本語での中間領域の経験的根拠を示した。

[4] DP の中間領域：名詞が主要部となっている構造においても、中間領域を想定した構造分析が可能であることを示した (例えば、同上の論文など)。したがって、中間領域を仮定しても CP と vP の平衡性だけでなく、CP と DP の並行性も維持できることになる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 中村浩一郎	4. 巻 75
2. 論文標題 Issues of the Rigid Word Order Restrictions among Topic Elements--Interface between Cartography and Information Structure--	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本英文学会九州支部第75回大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 19-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福田稔、古川武史	4. 巻 75
2. 論文標題 統語構造と意味解釈のインターフェイス--多重主語構文を巡って--	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本英文学会九州支部第75回大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 21-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福田稔、古川武史	4. 巻 30
2. 論文標題 日本語の終助詞と格助詞脱落について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 宮崎公立大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 65-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Fukuda, Minoru (福田 稔)	4. 巻 29
2. 論文標題 Feature Inheritance and Case Marker Drop in Non-standard Japanese	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宮崎公立大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 157-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Minoru Fukuda (福田 稔)	4. 巻 28
2. 論文標題 On Virtually Free MERGE	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宮崎公立大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 121-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Minoru Fukuda (福田 稔)	4. 巻 28
2. 論文標題 A Syntactic Analysis of the Lexical, Pragmatic, and Semantic Properties of "Clausal" Nominal Expressions in Colloquial Japanese	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宮崎公立大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 129-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Minoru FUKUDA (福田 稔)	4. 巻 27
2. 論文標題 A Merge-based Analysis of the Left Periphery of vP	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宮崎公立大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 219-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中村浩一郎	4. 巻 1
2. 論文標題 英語の補文内におけるトピック・フォーカス構造のカートグラフィー分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語におけるインターフェイス	6. 最初と最後の頁 42-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Fukuda, Minoru (福田 稔), Furukawa, Takeshi (古川武史)	4. 巻 31
2. 論文標題 Genitive Subjects and Case Marker Drop in Japanese	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 宮崎公立大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 91-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Fukuda, Minoru (福田 稔), Furukawa, Takeshi (古川武史)	4. 巻 25
2. 論文標題 On the Genitive Subject and Right Peripheral Elements in Japanese	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 SICOGG25_Proceedings	6. 最初と最後の頁 148-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 福田稔、古川武史
2. 発表標題 統語構造と意味解釈のインターフェイス--多重主語構文を巡って--
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第75回大会 シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村浩一郎
2. 発表標題 統語論と言語学関連分野とのインターフェイス
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第75回大会 シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Minoru Fukuda (福田 稔), Takeshi Furukawa (古川武史), and Koichiro Nakamura (中村浩一郎)
2. 発表標題 A Cartographic Analysis of “Clausal” Nominal Expressions in Colloquial Japanese
3. 学会等名 SLE 2020 (Societas Linguistica Europaea (ヨーロッパ言語学会)) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Minoru Fukuda (福田 稔), Takeshi Furukawa (古川武史)
2. 発表標題 On the Genitive Subject and Right Peripheral Elements in Japanese
3. 学会等名 25th Seoul International Conference on Generative Grammar (第25回ソウル国際生成文法学会) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Minoru Fukuda (福田 稔), Takeshi Furukawa (古川武史)
2. 発表標題 Genitive Subjects and Case Marker Drop in Japanese
3. 学会等名 TFS23: Topic, Focus, Subject - between grammatical necessity and information-structural load (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Koichiro Nakamura (中村浩一郎)
2. 発表標題 Structural Positions and Focal Stress Dictate Functions and Interpretations of Japanese Manner Adverbs
3. 学会等名 SLE 2023 (Societas Linguistica Europaea (ヨーロッパ言語学会)), Workshop 17: The Concept of Manner and Its Linguistic Realizations (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 中村浩一郎（編集、執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 228
3. 書名 統語論と言語学諸分野とのインターフェイス	

1. 著者名 西原哲雄・都田青子・中村浩一郎・米倉よう子・田中真一 編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 304
3. 書名 言語におけるインターフェイス	

1. 著者名 中村浩一郎（共著）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 148
3. 書名 ブックレット統語論・文法論概説	

1. 著者名 中村浩一郎（共著）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 180
3. 書名 ブックレット英語学概説	

〔産業財産権〕

〔その他〕

インターネットウェブサイト
「中間領域の構造分析と文法現象の研究」
<https://middlefield.fc2.net/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中村 浩一郎 (Nakamura Koichiro) (50279064)	兵庫教育大学・学校教育研究科・教授 (14503)	
研究分担者	古川 武史 (Furukawa Takeshi) (80238667)	福岡工業大学・その他部局等・教授 (37112)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------